

風土記の丘の花だより¹⁰⁴

今、そしてこれから見られる植物(2021年9月25日)

仲秋の名月はなんとか見ることができましたね。翌日の水曜日が十六夜(いざよい)、そして立ち待ち、居待ち、そして今日 25 日は寝待ち月ですね。昔の人は月にも風情のある呼び名を考えたものです。風土記ではいろいろなハギが咲いています。自生のものでは、花の柄が長いのがヤマハギ、花が枝先に縮こまって咲くのがマルバハギです。どちらもたくさん咲いています。見比べてみてください。



少し湿ったところに、小さいながらもとてもきれいなウリクサの花が咲いています。以前はゴマノハグサ科でしたが、今はアゼナ科に分類されています。漢字で書くと瓜草で、実の形がマクワウリに似ているからだといわれています。でも大きさがあまりにも違いすぎるので、似ているという実感はありません。



上のウリクサと同じく少し湿った所一面に生えるこの草はチドメグサです。その名前のとおり昔は止血に使われていたそうです。1cmに満たない円い葉をびっしりと敷き詰めますが、よく見ると所々に小さな花が咲いているのが分かります。何種類かありますが、古代米の田んぼの周りには少し大きめのノチドメがたくさん生えています。どちらも余りにも地味で、どなたも気に留めない草でしょうね。



アキノノゲシの花が咲き始めました。ハルノノゲシとは対照的で、色も淡く、茎も柔らかく、刺もありません。秋の風にユラユラ揺れる姿に風情を感じます。ふつう葉は切れ込んでいますが、細長いものあってホソバナアキノノゲシという長い名前でも呼ばれることもあります。



イネ科の植物はどうしても地味に見えてしまいます。このノガリヤスもほとんどの方が見過ごしがちな草だと思います。この写真でも「どれ?」と思ってしまいますよね。中央のなんかヒョロヒョロしているのが、それです。刈安(かりやす)は昔から染料に用いられたススキに似た植物です。これは野原に生える刈安みたいな草だという意味の名前です。

松下